

兄や叔父、従兄弟 5 人は連行後殺害、祖父母は目の前で刺殺された

伍正禧（男） 1923 年生まれ 当時の住所 難民区内唱経楼（現在の珠江路）

私の生まれは南京です。日本の飛行機が十二月十三日に南京を空襲した時、私たちは一生懸命逃げました。国際安全区の中に逃げ、そこに住むことになりました。私は、回族という中国の少数民族です。その時、私は数えの十四才で、家族親戚はみな一緒に、中にひとつの小さな庭のある部屋に住んでおりました。

日本軍が南京を占領してから三日目の午後三時ごろ、日本兵が三人、私達が住んでいる家に入ってきました。その中の二人は銃を持ち、もう一人は大きな刀を持っていました。日本軍がこちらに来たことを見て、みんな身を隠していました。私の一家も同じように小さな部屋に隠れていました。そして、日本軍が私たちの部屋に入り、私の一人の兄、従兄三人、もう一人の叔父さんの五人を別の部屋に連れていきました。同時に日本の兵隊は、テーブルの上に指で「支那軍」と書きました。この字を見ても私たちは中国人ですから、何のことか意味が全然わかりませんでした。お互い顔を見合わせ何だろうとささやいていると、日本兵は、それを見てたいへん怒りました。家にいる人は乱暴に突き飛ばされ、ほとんどが庭に連れ出されました。私は見ていて恐くて泣きだしました。近所のどの家からも若者たちは外に連れ出されました。私は子どもでしたから道の側にいってみましたが、はっきり確かめられないくらい大勢の人がいました。それらの人々はみんな、日本軍にどこかへ連れていかれました。その時は五時頃で冬でしたから早くも外は暗くなっていました。妻は夫を、子供は父や兄を、親は息子を思って、いつ帰ってくるかと待っていましたが、みんないつ迄も帰ってこないのです、泣きだしました。

翌日の朝、南京市のどこかに死体があると噂で聞きました。しかし、国際安全区の範囲外にありますから恐くて行けませんでした。そうは言ってもやはり、自分の家族を探したいので、さらに聞いてみました。話によると、大方巷に第三病院でしたか、その建物の後には河が流れています。その中にもたくさんの死体があると聞きました。夕方暗くなると日本の軍隊は駐屯するところに帰りますから、五時ちょっと過ぎてからそこに行くことにしました。家を出てすぐ、金陵大学の近くには桑畑がたくさんありますが、そこを通っていても、死体がたくさん見られました。死んでいる人の形は、本当に色々ありました。近づいてみると、犬も猫もいてそこにある死体を食べていました。私たちはその光景を見て心から悲しくなりました。

河に着く前から、町中の池や河の水は赤く染まっていました。河の側に行ってみると、たくさんの人が死んでいました。みな縄で後ろ手に縛られ一緒に殺されましたから、顔を河に浸して、まったく顔を見ることができませんでした。また、北の方揚子江の近くの下関と言う所に行ってみましたが、多くの人々が同じように殺されて折り重なっ

ていました。死体があまりにも多くてもう確かめることが出来ませんでした。それでその日は、しかたなく帰りました。

翌日の昼ごろ、元の家の方に住んでいた人が、私たちの避難している所に来てくれました。隣の人は、「あなたの家は、もう焼き尽くされました。」と話してくれました。それで、その夜もう一回元の家の方に帰りました。自分の家は焼き尽くされ、留守番をしてくれていたおじいさんの姿が見えないので探していると、焼け跡からおじいさんの足がひとつ覗いていました。おじいさんは、焼き殺されていたのです。

二、三日たって、一人の日本兵が私の避難していた所に来ました。銃を持ってはいませんが、刀を持っていました。その時、私の家族はほとんど逃げてしまい、祖父と祖母と私の三人が家にいました。日本兵は部屋に入ってくるなり、私の祖母を捕まえて、「花姑娘はいるか。」と聞きました。私は聞いていても何の意味かわかりませんでした。



祖父は答えられず黙っていると、日本兵は祖母を捕まえ刀で腹のあたりを突き刺しました。日本兵は次に、ベッドで寝ていた祖父に近づき、体を三箇所刺しました。布団の上も中も血がいっぱい溢りました。午後になってから祖父は死んでしまいました。家族の中の五人は、日本兵に連れ去られ、ついに帰ってきませんでした。留守番していたおじいさんも焼き殺され、祖父も殺されました。家族の大部分が日本軍の被害者となりました。私のつらい話は以上の通りです。

(1998年12月日本へ招請、聞き取り)

写真：2016年3月鼓楼病院付近で撮影